

大学生のダンスにおける動感発生の様相化分析

萩原 香 織 [鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター研究協力員]

高岡 治 [鹿児島大学教育学系 (保健体育)]

A modality analysis of the kinasthese in dance of college students

HAGIHARA Kaori・TAKAOKA Osamu

キーワード：ダンス授業、現象学的運動学、動感構造分析、動感様相化分析、大学生

1. 問題の所在と研究目的

平成 20 年に文部科学省が発表した学習指導要領の改訂によりダンス授業が必修化となった。校種によってその開始時期に差はあるが、少なくとも 5 年以上は経過している。実際の教育現場において、どれほどの学校が積極的にダンス授業に取り組んでいるのだろうか。筆者の周りの教員からは、あまり良い反応が得られないのが現状である。運動会や体育大会のマスゲームなどに置き換えられていたり、授業数が大幅に少なかったりと、未だに消極的であることのほうが多い。その要因は様々であるが、リズムダンスや現代的なリズムのダンスにおいて、「リズムにのって」踊るということに抵抗を感じている教員が多いということも一つの要因であるようである。ダンス授業をこれまで行った経験のある女性教員であっても「創作ダンスは経験があるから何となく想像がつくけど、リズムダンスは経験がないのでどういう風に教えればいいのかかわからない」と述べており、またダンス授業の経験がない教員は「私自身リズム感がないからどうすればいいのかかわからない」と述べていたり、教師自身のリズムダンスに対する苦手意識が大きな問題であるように感じられる。これは、指導要領に記載されている「リズムにのって」という言葉が大きく影響を与えているのではないかと考える。

「リズムにのる」というのは、聴覚で感じる音楽のリズムと、自分自身の動きのリズムが共調することで成り立つのであって、「リズムにのれない」と感じる場合は、このどちらかが抜け落ちているか、または両者をうまく共調できないかである(宮本 2011)。このことを理解していない指導者が多いため、教員自身も「リズム感がないから教えられない」と感じてしまい、実際の指導場面においても、できない学習者に対し「リズム感がないからだ」と伝えてしまう。このように伝えられた学習者はその後ずっと「私はリズム感がないから踊れない」と感じながら生きていくことになるだろう。

実際、筆者が行う大学でのダンス授業においても、オリエンテーションでは「ダンスはリズム感がないから苦手」という学生がほとんどであり、体育専攻の学生でありながらダンスは今まで避けてきたと話す。その一方で、メディアなどで目にするアーティストのダンスや、ヒップホップダンスは「かっこいいと思うし踊ってみたい」というようにも述べるが、自分とは遠い存在であり到底出来そうにないというイメージを持っている。このように、体育専攻の学生でも消極的なイメージであるため、体育専攻ではなかった小学校の教員や、身体を動かすことが苦手だと感じている児童・生徒においては、もっとダンスに対して否定的なのではないかというのは察しがつく。

このようなダンスに否定的な教員や、リズムにのれないと感じている児童・生徒が求めているのは、「どのよう

にしたらリズムにのれるのか」「リズムにのって踊るというのはどういうことか」を我が身をもって経験したいということであり、これはつまり「いかにしてこの動感構造を我が身に構築させていくか」ということである。

そこでこれまでの研究成果をもとに、実際の指導場面において「できない学習者」を対象に、「リズムにのって踊る」というその動感構造を構築していく過程を追うと同時に、その「できない」理由を考察し、いかにして「できない」から「できる」ようになるのかという動感発生の様相を分析していきたい。本研究では実際の指導場面で、なかなか習得させることが困難であると感じた「ランニングマン」というステップに注目し、その動感発生分析から、新たな動感構造を明らかにすることを目的とする。

2. 動感構造分析

ダンス・舞踊における＜動き＞は、いうまでもなく生理学的なエクササイズや物理学的な位置移動などの＜動き＞とは区別しなければならない。このような数学的時空間における外部視点から捉えた科学的な運動概念は、舞踊のもつ感覚的な価値知覚による＜動き＞とは明らかに異なるものである。舞踊の動きは、「動きつつある主観身体」の＜感覚質＞、すなわち動きのエレガントさ、状況に応じて即興的に動ける高次元の感覚質がその舞踊運動の意味核をなしている」とされる（金子 2014）。このことは、電子機器に優劣を判定させる測定競技とは異なる評定競技としての特徴を持つともいえるであろう。つまり、ダンスの動きの良し悪しは、動感質の分かる人にしか判断できないのであり、金子もいうように「舞踊の運動分析は、踊る人の感覚質それ自体の発生様相を本質必然的に主題化せざるをえない」ということになる（金子 2014）。ここに、ダンス・舞踊を指導しようとするとき、できる人の自己運動の価値意識を厳密に分析する必要性がみとめられる。したがって、ここに今回取り上げることとなった「ランニングマン」の動感構造を明確にする必要があると考える。

2-1. 「ランニングマン」の動感構造分析

「ランニングマン」は、その場で足を交互に入れ替え、まるで走っているかのようなステップである。この運動を行う際、自身の能動的志向性に浮かんでいるのは、「タッ・ター・タッ・ター」という“リズムを刻む”である。この“リズムを刻む”というのは、振り付けや曲調によって、アップのリズムであったり、ダウンのリズムであったりする。つまり、上半身の“リズムをどのようにとるか”ということが、能動的志向性における自発的な高次作用として存在している。この“リズムを刻む”という動感を支えているのは、もちろん“アップのリズム”、“ダウンのリズム”がまとまってできた“体幹でリズムをとる”という動感である（宮本 2012）。これは先行研究により明らかになっており、その関係性は図1のようになっている（図1）。

このようなことから、もはや“足を動かす”という動きそのものは能動的志向性ではなく、受動的志向性として背景に沈んでしまっていることがわかる。したがって、この“リズムを刻む”という志向性をあえて使わないようにして受動的志向性に沈んでいる“足を動かす”という動きそのものを支えているものについて探っていく。例えば右足先行の場合、右足を前に踏み込んだところから運動がはじまるのだが、ここから運動を継続しようとする、次は左足を前に踏み込もうとする。このように踏み込むことの連続、つまり“踏み込み続ける”という動感が顕在化してくる。この“踏み込み続ける”という動感をまとめ上げているものは何かを考えてみると、最初に出てきた“踏み込む”という動感はもちろんのこと、その踏み込んだ足を“引き寄せる”という動感の存在が浮き上がる。

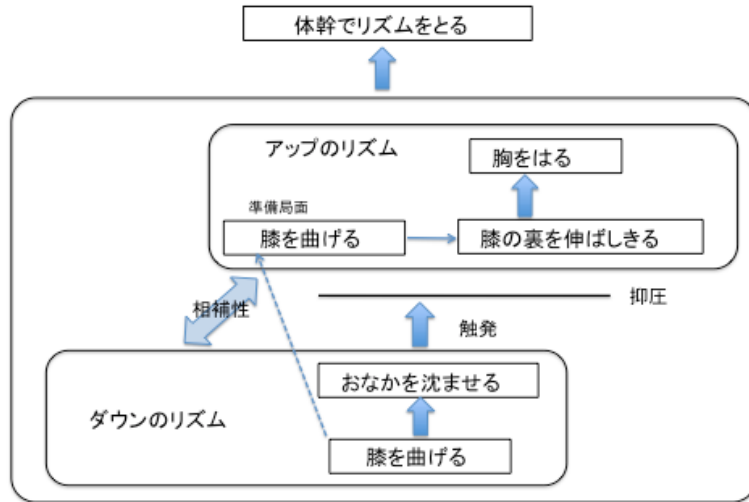


図1 体幹でリズムをとる動感構造

この“引き寄せる”ことをしなければ、その場でステップを踏むことは出来ずにどんどん前に進んでしまう。“踏み込む”と“引き寄せる”は、一つのまとまりをもって“踏み込み続ける”という志向性を作り上げていると考えることができる。さらに、この二つの動感には、金子が「右手で左手を触る場合とか、指先で額を触る場合」という例を用いて説明する反転化原理が息づいている。これは「＜触るもの＞と＜触られるもの＞の転換可能性」という志向体験が生じ、そこに目的論的な反転化可能性が含意態となってくる」ことによる（金子 2009a）。つまり“踏み込む”という動感を顕在化させようとする、“引き寄せる”という動感はその背景に沈み、“引き寄せる”という動感を顕在化させようとする、“踏み込む”という動感はその背景に沈むという関係性が成り立つ。さらに、この反転化原理は「反転化できる動感化能力がいつも潜在態として待機し息づいていることが不可欠」（金子 2009b）であるから、“踏み込む”と“引き寄せる”というのは私の身体でありありと経験できるというのが必須条件となる。

このような背景が受動的志向性において支えになっているということが明らかとなった。したがって、ランニングマンの動感構造は図2のようにになっていると考えることができる（図2）。

2-2. 事例による動感構造の再検討

このように分析できた「ランニングマン」の動感構造を拠り所にして、実際の指導場面において更なる深層を明らかに出来るのではないかと考える。

今回の対象者はダンス未経験の男子学生（大学4年生）である。彼は授業の最初で「ダンスは本当に苦手です」と言っていた。やはりその理由は「リズムにのれないから」という。授業の前半では、アップやダウンのリズムの取り方を中心に練習した。この時点で、何とかリズムを理解して動けるようになった。そんな彼に「ランニングマン」はこのような動きであると提示してみると、「無理無理、そんなのできません」と完全に否定された。実際にやらせてみると、最初の一步を“踏み出し”，その足を“引き寄せる”ような動きをするのだが、なぜかどんどん前に進んでいってしまう。もちろんそこには全くリズムは感じられない。彼自身もどうしてこうなるのか分から

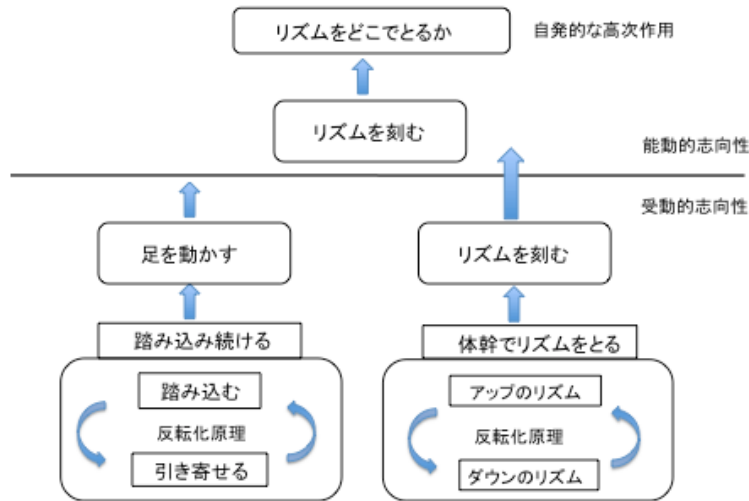


図2 ランニングマンの動感構造

ない様子であり、動いた後で「これは違いますね」とも言っていた。この時点では彼にとっては「ある新たな意味がすでに構成されていた意味を抑圧しながらその上に重なるということが起こっている」こととなり「否定の様相」であるといえよう(フッサール 1997a)。ここでは、“踏み込む”という動感形成されているようであるが、“引き寄せる”という動感が、本来の望ましいものではないようであった。“踏み込み”はするけど“引き寄せ”られなくて、前進してしまう結果となったのだろう。筆者が観察したところ、“引き寄せる”動きが小さいように感じたため、「もっと積極的に引いてみて」と伝えてみた。すると、今度は“引き寄せ”が大きくなりすぎて、後ろに重心がのってしまい、次の“踏み込み”がぎこちなくなってしまった。

ここで彼自身から「反対の足はどうすればいいのですか」と質問してきた。つまり、右足先行で“踏み込み”、“引き寄せ”、次に左足を“踏み込み”、“引き寄せ”時の右足の動きが分からないということである。私自身、今まで全く意識していなかったことである。「そうだよね、反対の足は“踏み込む”時に後ろに引くようにしたらいいよ」と伝えた。さらに、「前に踏み出した足を引き寄せると同時に、後ろに引いた足をひざの高さくらいまであげあげてみて」と伝えた。すると彼は、「なるほど、最初に踏み込む時に、反対の足をさげるから、チョキのかたちと同じですね」と述べた。足でじゃんけんをする時のチョキのことである。さらに「チョキの後はケンケンだ」といって、「チョキ、ケン、チョキ、ケン…」と自分で言いながら動き出した。すると、ぎこちないながらも前に進むことなくその場でステップが踏めるようになった。

このような事例から、あらたな動感素材が浮かび上がってきた。“踏み込み続け”ない方の足を“後ろに引く”というものと、膝の高さくらいまで“引き上げる”である。これらは出来る人にとっては、受動志向の深層に沈み込んでおり、忘れ去られてしまっていたものである。それが、今回のように出来ない学習者を前に、観察・交信・代行・処方という手続きをしていくなかで、改めて顕在化してきたものである。

ここで彼が“チョキ”と“ケンケン”に気づくまでに至った背景を考えてみる。まず“後ろに引く”という動感を能動的志向性に浮かび上がらせることができたということは、受動的志向性において、“踏み込む”と“後ろに引く”が一つのまとまりをもつことができたということである。フッサールは、「自我にとっては意識に即して構

成されるものは、それが触発するかぎりにおいてのみ現存する」と述べており、これは能動的志向性として意識の表面に現れる際には、「触発」という能差が働いているということを表している。ここでいう触発とは「意識に即した刺激」である。さらに、「構成されているなんらかのものは、触発的な刺激を与えるかぎりにおいて所与されており、自我がその刺激にしたがいながら、注意し、把握しつつそれに対向する限りにおいて所与される」と述べており、自我によって触発が受容されることは「能動性の一種に数えられ」ることになるので、「触発とその受容は受動的綜合の次元から能動的綜合の次元へ移行することを意味する」ことになる(フッサール 1997b)。これらのことから、受動志向において連合としてまとまりをもったものは、触発という能作によって、受容的に自我対向することで意識の表面に浮かび上がることができるといえる。

このような背景において“後ろに引く”という動感が浮かび上がる。さらにそれが“じゃんけんのチョキ”だと気づくことができたということは、“踏み込む”と“後ろに引く”というまとまりが、「新たな素材へと連合的に転移する」(フッサール 1997c)伝播という能作によって、“チョキ”を「同質性によって結合」(フッサール 1997c)したからだと考えられる。ここにおいて注目すべき点は、能動的志向性でそれを感じ取る以前に、受動的志向性においては“踏み込み”と“後ろに引く”が、“チョキ”という動感に伝播しているということである。受動志向において、そのような背景があるからこそ、能動志向において“後ろに引く”が意識の表面に浮かび上がった後すぐに“チョキ”だと気づくことができたと考えられる。また、これと同じように、“引き上げる”という動感が能動志向に浮かび上がるには、“引き寄せ”と“引き上げる”が受動的志向性において一つのまとまりとして存在し、同時に“ケンケン”に伝播したという背景があるからこそであり、その結果、“ケンケン”に気づくことができたと考えられる(図3)。

3. 「リズムにのる」までの様相化分析

いよいよ足のステップを踏むという動感が形成できた。しかし、ここからがダンスの特徴であり醍醐味であるのだが、本来めざす形態は「リズムにのって」ステップが踏めるかということである。熟練者の動感構造において能動的志向性にあるものは「体幹でどうリズムをとるか」であった。したがって、足のステップができたからといって「リズムにのって踊る」ことにはならないのである。先ほどの学生は、足のステップを習得した段階で、自ら音

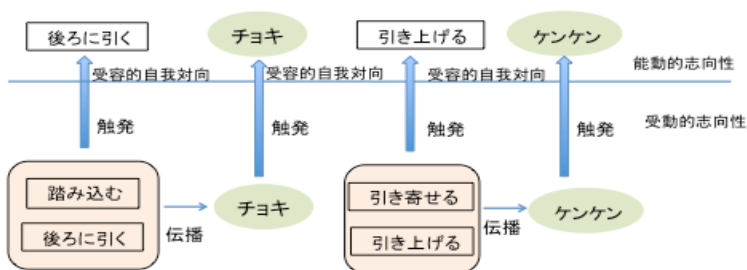


図3 能動志向に浮かび上がるまでの関係性

も考察することができたように思う。まだまだ未熟な考察ではあるが、この経験は今後の指導に大いに役立つとも考えている。金子は「学校体育の世界では、その根源的な身体性の生成や消滅をわが身で捉え、どう動くのかという<今ここ>の<身体経験の豊かさ>が改めて学校の身体教育に主題化される本質必然性に注目しなければならない」と述べる(金子 2015)。体育の教師は、その授業の中で、新しい動きを学習させる立場にある。その方法は学習マニュアルを提示し、マネジメントすることが大半であり、それでも出来ない場合はビデオを見せたり、または自身の映像をみせることで、あとは自分でどうにかしなさいというような金子のいう「野次馬的な傍観者」となってしまうことが、一番の問題点であるように思う(金子 2009c)。たとえそれが教師自身のすばらしい見本であったとしても、学習者が自らの動感を発動させながら観ることが出来なければ意味がなくなってしまう。学校の体育授業という時間の制約がある中、いかに学習者の成功体験を増やしてあげられるのか、「できた!」という喜びを感じさせてあげるかということには、動きを見抜く能力が必要不可欠となる。

それには、大学における教員養成課程において自らの動感発生と向き合い、「できない」から「できる」にあたつての動感発生を自ら経験することも大切であると感じている。今回検討した学生以外にも苦労しながらなんとかできるようになった学生も多くいた。このような経験から、自らの身体知を積み上げることも教員養成課程における重要課題であると考えている。今回研究したことをもとにして、大学生だけでなく多くの学習者を対象に、さらなる動感発生の様相化分析を試みていくことが今後の課題である。

5. 参考文献

- エドムント・フッサール／山口一郎・田村京子訳 (1997a), 受動的総合の分析, 国文社, pp.52-53
 エドムント・フッサール／山口一郎・田村京子訳 (1997b), 受動的総合の分析, 国文社, pp.215-232
 エドムント・フッサール／山口一郎・田村京子訳 (1997c), 受動的総合の分析, 国文社, p.218
 エドムント・フッサール／山口一郎・田村京子訳 (1997d), 受動的総合の分析, 国文社, p.57
 金子明友 (2009a), スポーツ運動学-身体知の分析論-, 明和出版, p.194
 金子明友 (2009b), スポーツ運動学-身体知の分析論-, 明和出版, pp.194-195
 金子明友 (2009c), スポーツ運動学-身体知の分析論-, 明和出版, p.11
 金子明友 (2014), 舞踊の運動分析論. 女子体育, 56(8・9): 20-25
 金子明友 (2015), 運動感覚の深層. 明和出版, p.294
 宮本香織 (2011), ダンスにおける『リズムにのる』ことについての一考察. スポーツ運動学研究, 24: 65-73
 宮本香織 (2012), <リズムにのる>動感発生の様相化分析. 伝承, 12: 31-42

